2006年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	生産	陸上加工	輸入	輸出	消費地10大都市	在庫	生産額(億円)	輸入(億円)	輸出(億円)	消費地10大都市	魚介類消費支出１世帯	為替レート
17	5765	2090	3343	468.8	1897	1245	16007	16686	1753	774	93,041	109.6
18	5669		3153	594.1	1781	1239		17052	2044	815	91,943	116.3
%	98	0	94	127	94	100	0	102	117	105	99	106

数　　量

本年の国内生産量はほぼ前年並みであった。

全体的な特徴としては生鮮のマグロ類の増加が目立ち、まき網やトロールでの漁獲不振であったスルメイカの減少が顕著であった。

大きく増加した魚種は、ビンナガ、メバチ、マイワシ、ウルメイワシ、ムロアジ等であり、大きく減少した魚種はクロマグロ、冷ビンナガ、スルメイカ、ホッケ等であった。

輸入は、315万トンと引続き為替円安、各国との競合・買い負け等もあって前年をやや下回った。

この中で目立って増加した魚種は少なく比較的増加したのは、アジ、フグ類、タラコ（原料・製品とも）、ウナギ製品、魚粉等であった。逆に減少している魚種が多く、中でもサバ類、タラ、イワシ、メバチ、キハダを始め赤魚、シシャモ、サケ・マス類等で、その他にも全体的に微減の魚種が目立った。

輸出は、約59.4万トンで前年（46.9万トン）を引続き上回った。

本年は、目立って多くなったのはサバ類やタラ類で、特にサバは国内生産も順調で海外への輸出が多かった。またタラを始め白身系の魚やビンナガ等も多かった。

消費地入荷量（10大都市）は、178万トンで前年(190万トン)を引続きやや下回り近年の減少傾向は今年も続いており、消費需要の減少がはっきりと出てきている。

目立って多くなった魚種は、生鮮ではサバ類、マイワシ、天然のブリ類で、冷凍ではサケ類であった。大きく減少した魚種は、生鮮ではカツオ、マグロ、養殖ブリ類で、冷凍ではキハダ、ニシン等であった。本年は生鮮品、冷凍品、加工品とも減少し、近年順調に消費を伸ばしていた海藻類も減少に転じた。

在庫量は、月平均124万トンでほぼ前年（125万トン）並みであった。これは、国内生産や輸入量が減少、輸出が増加したもの、国内消費需要の低迷がもたらしたものと推察される。

価格・金額

１８年の産地価格は、カツオマグロ類の高値もあり、昨年を上回ったものみられる。

本年の産地価格の特徴は、冷凍マグロ類や生・冷カツオが減船・規制等の関係で上昇が顕著であったのを始めマアジが漁獲不振で、サバ類がサイズも良く、等で上昇した。逆に下がったのは漁獲の増加したマイワシ、ウルメイワシ、ムロアジ等であったが、総じて下がった魚種は少なく、輸出好調であった魚類も含め、高めの推移であった。

消費地価格（10大都市）は、815円で産地高を受けて前年（774円）を上回った。

目立って高くなった魚種は、生鮮ではマグロ、サケ類、養殖ブリ、タイ類であり、冷凍ではマグロ類全般、輸入価格の上昇のサバ類等であった。

逆に安かったのは生鮮では好漁であったマイワシとサバ類位で、冷凍でサンマが下げた程度で、塩干、塩蔵は目立った下落は少なくクジラが目立った程度であった。

輸入金額は、１兆7052億円（前年:１兆6686億円）で前年を366億円上回った。

輸出金額は、2044億円で前年（1753億円）を291億円上回リ、今年も円安もあり量、金額とも増勢傾向が顕著であった。

円　レ　ー　ト

18年の円レート（対ＵＳドル）は、年平均116円で前年（110円）より6円の円安となった。

円レートは、85年の９月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、95年秋から円安に転じ、97年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安等も重なり一層円安が進行し、98年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高(113円)へと反騰したが、99年は夏場までやや円安(114～121円)で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。01年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、９、10月に119円とやや円高に戻したものの12月には124円と円安に急落した。02年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。03年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11,12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。04年は年初106円の円高で始まり、５月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。05年は年初の103円から下半期には円安に変わり７月には110円まで下げ、その後一貫して円安で推移し、12月には119円まで下げ、年末には若干円高となり117円台で推移した。06年、年初は引続き円高の116円でその後も117円とやや円安で推移していたが、５月に112と円高に振れたが、それ以降は11月の119円までじり安推移し、11,12月と若干の円高に戻した。

（参考：84年237円→85年240円→86年170円→87年146円→88年128円→89年137円→90年145円→91年135円→92年127円→93年112円→94年102円→95年94円→96年108円→97年121円→98年131円→99年114円→2000年107円→2001年121円→2002年126円→2003年116円→2004年108円→2005年110円）2006年→116円

石　油　価　格（１kl当たり）

18年のＡ重油価格は、年初は前年来のからの高値を受けて51,000円から始まり2月中旬に54,000円、3月中旬55,000円、４月上旬56,000円、5月中旬に60,000円、その後小康状態を保ったが8月上旬に62,000円に上げた。その後は保合で推移したが、10月下旬61,000円と下げ基調になり、11月上旬59,000円となり、12月下旬に57,000円に下げたが、周年を通じて高騰が著しく、漁業経営にも一層深刻な影響を与えた。

参考：近年の最高値74,000円/kl（1982年11月）